

Plücker 座標の判定について

一 柳 宣 男

A Criterion for Plücker Coordinates

Nobuo HITOTSUYANAGI

The Faculty of Education, Kagoshima University

Plücker 座標の判定条件としてつぎの関係式はよく知られている。

$$\sum_{i=0}^k (-1)^i P_{i_0 \dots i_{i-1} i_{i+1} \dots i_k} P_{i_1 j_1 \dots j_{k-1}} = 0. \quad (1)$$

この証明には種々の方法³⁾⁵⁾⁶⁾があり、異なる立場からの判定条件の考察¹⁾もある。著者は Grassmann 多様体の研究²⁾に関連して(1)の条件を精密化する必要を感じ、やや一般化した形での判定条件を得た。証明のアイディアは B. L. van der Waerden⁷⁾による。

判 定 定 理

本報においては添数は常に $1, \dots, n$ の範囲を動くものとし、 $P_{i_1 \dots i_k}$ は常に添数に関して歪対称であるとする。

$\varepsilon \binom{i_0 \dots i_k}{i_0 \dots i_k}$ を置換 $\binom{i_0 \dots i_k}{i_0 \dots i_k}$ の符号とし、

$$H_{i_1 \dots i_{\lambda-1} [i_0 \dots i_k] j_{\lambda+1} \dots j_k} (P) \equiv \sum \varepsilon \binom{i_0 \dots i_k}{i_0 \dots i_k} P_{i_1 \dots i_{\lambda-1} i_0 \dots i_k \dots i_k} P_{i_k \dots i_{\lambda+1} \dots i_k j_{\lambda+1} \dots j_k} \quad (2)$$

と定義する。ただし和は $(i_0 \dots i_k)$ のすべての置換 $(i_0 \dots i_k)$ にわたるものとする。

命題 1. $\{P_{i_1 \dots i_k}\}$ が Plücker 座標ならばすべての添数に対して(2)式は 0 となる。⁴⁾

証明. Laplace の展開定理による。

Plücker 座標の判定条件として(2)の関係式が最小限いくら必要であろうか。この問に対して著者はつぎの結果を得た。

定理. $\{P_{\beta_1 \dots \beta_k}\}$ を添数に関して歪対称なすべては 0 でない、 $P_{\alpha_1 \dots \alpha_k} \neq 0$ とする、 ${}_n C_k$ 個の実数の組とする。任意の添数の組 $(\beta_1 \dots \beta_k)$ ($\beta_1 < \dots < \beta_k$) に対して λ を任意に一つずつ定めて方程式

$$H_{i_1 \dots i_{\lambda-1} [i_{\lambda} \dots i_k] j_{\lambda+1} \dots j_k} (P) = 0 \quad (3)$$

を考える。ここに $(i_1 \dots i_k)$ は $(\alpha_1 \dots \alpha_k)$ のある順列 $(j_1 \dots j_k)$ は $(\beta_1 \dots \beta_k)$ のある順列で、(3)が恒等式とならないように選べる場合にはそのように選ばれているものとする。(命題 2 参照)

I. $\{P_{\beta_1 \dots \beta_k}\}$ が Plücker 座標なるための必要十分条件は(3)がすべての添数の組 $(\beta_1 \dots \beta_k)$ ($\beta_1 <$

… $\langle \beta_k \rangle$ に対して成立することである。

II. (3) から恒等式でない式を 1 個以上除いた条件 (F) はもはや Plücker 座標の十分条件となり得ない。[注]

特に,

$$H_{i_0 \dots i_k, j_1 \dots j_{k-1}}(P) \equiv \sum_{l=0}^k (-1)^l P_{i_0 \dots i_l \dots i_k} P_{i_l j_1 \dots j_{k-1}}$$

と定義すれば定理の特別な場合としてつぎの結果を得る。

系 1. 定理の条件 (3) は

$$H_{i_1 \dots i_k, j_1, j_2 \dots j_k}(P) = 0$$

としてよい。ここに $(i_1 \dots i_k)$, $(j_1 \dots j_k)$ は $(i_1 \dots i_k, j_1)$ がすべて異なる添数となるような $(\alpha_1 \dots \alpha_k)$, $(\beta_1 \dots \beta_k)$ のある順列である。

系 2. 定理の条件 (3) は

$$H_{j_1 \dots j_k, i_1, i_2 \dots i_k}(P) = 0$$

としてよい。ここに $(i_1 \dots i_k)$, $(j_1 \dots j_k)$ は $(j_1 \dots j_k, i_1)$ がすべて異なる添数となるような $(\alpha_1 \dots \alpha_k)$, $(\beta_1 \dots \beta_k)$ のある順列である。

命題 1 より条件 (3) 及び条件 (F) が必要であることは明らかである。次節でこれらの十分性を考察する。

判定定理の証明

つぎの性質は H の定義より明らかである。

補題. $i_{\lambda-1} = i_k$ ならば

$$(-1)^k (k - \lambda + 2) H_{i_1 \dots i_{\lambda-1} [i_0 \dots i_k] j_{\lambda+1} \dots j_k}(P) \equiv \lambda H_{i_1 \dots i_{\lambda-2} [i_{\lambda-1} i_0 \dots i_{k-1}] j_{\lambda+1} \dots j_k}(P).$$

I の証明. $x_i^\gamma = P_{\alpha_1 \dots \alpha_{\gamma-1} \alpha_{\gamma+1} \dots \alpha_k}$ ($i=1, \dots, n$; $\gamma=1, \dots, k$)

で定まる k 個の一次独立なベクトル $X^\gamma = (x_i^\gamma)$ ($\gamma=1, \dots, k$) を考え, これらのベクトルで張られる部分空間の Plücker 座標を $\{Q_{\beta_1 \dots \beta_k}\}$ とする。 $Q_{\alpha_1 \dots \alpha_k} \neq 0$ 及び (3) が同次式なることより

$$P_{\alpha_1 \dots \alpha_k} = Q_{\alpha_1 \dots \alpha_k} = 1 \quad (4)$$

と仮定して一般性を失わない。このとき

$$Q_{\alpha_1 \dots \alpha_{\gamma-1} \alpha_{\gamma+1} \dots \alpha_k} = x_i^\gamma = P_{\alpha_1 \dots \alpha_{\gamma-1} \alpha_{\gamma+1} \dots \alpha_k} \quad (i=1, \dots, n; \gamma=1, \dots, k). \quad (5)$$

添数の組 $(\beta_1 \cdots \beta_k)$ の中で $(\alpha_1 \cdots \alpha_k)$ のいずれとも異なる添数の数を m とし, m に関する数学的帰納法によって

$$Q_{\beta_1 \cdots \beta_k} = P_{\beta_1 \cdots \beta_k} \tag{6}$$

を証明する。

$m=0, 1$ のときは (4), (5) 式より明らかである。 $m \leq m_0$ のとき (6) 式が成立すると仮定して $m=m_0+1$ の場合を考察する。(3) 式においてもし $(j_1 \cdots j_k)$ が $(\alpha_1 \cdots \alpha_k)$ の添数を含めばその添数は $(i_1 \cdots i_{k-1})$ に含まれるから, 補題を用いて変形した式を考察することによりこの場合はおこり得ないと考えてよい。即ち添数 j_1, \dots, j_k はすべて $(\alpha_1 \cdots \alpha_k)$ と異なるとしてよい。もし $\lambda \leq m_0$ ならば $(j_{\lambda+1} \cdots j_k)$ は少なくとも一つ $(\alpha_1 \cdots \alpha_k)$ と異なる添数を含み, (3) 式において項 $P_{\alpha_1 \cdots \alpha_k} P_{\beta_1 \cdots \beta_k}$ の係数は 0 でなく他の項はすべて $m \leq m_0$ なる m に対応する添数を持つ。この式を命題 1 より得られる式

$$H_{i_1 \cdots i_{k-1} [i_\lambda \cdots i_k j_1 \cdots j_k] j_{\lambda+1} \cdots j_k}(Q) = 0$$

と比較し, 帰納法の仮定を用いて (6) 式を得る。

$\lambda = m_0 + 1$ のとき $(j_{\lambda+1} \cdots j_k)$ は $(\alpha_1 \cdots \alpha_k)$ の一部となり $k - (\lambda - 1) < \lambda$ ならば同様に (6) 式を得る。 $k - (\lambda - 1) \geq \lambda$ のときもつぎの場合以外は明らかである。

$$H_{i_1 \cdots i_{k-1} [i_\lambda \cdots i_{k-\lambda} \cdots i_k j_1 \cdots j_\lambda] i_1 \cdots i_{k-\lambda}}(P) = 0. \tag{7}$$

λ が奇数のとき (7) 式は恒等式となりこの場合はおこり得ない。(命題 2 参照) λ が偶数のとき (7) 式は

$$K \sum_{s_1 \cdots s_\lambda t_1 \cdots t_\lambda} \varepsilon^{(i_{k-\lambda+1} \cdots i_k j_1 \cdots j_\lambda)} P_{i_1 \cdots i_{k-\lambda} s_1 \cdots s_\lambda} P_{t_1 \cdots t_\lambda i_1 \cdots i_{k-\lambda}} = 0$$

但し $K \equiv (k-2\lambda+1)!_{k-\lambda+1} C_{k-2\lambda+1}$

(8)

となり, 項 $P_{\alpha_1 \cdots \alpha_k} P_{\beta_1 \cdots \beta_k}$ の係数は 0 でなく他の項はすべて $m \leq m_0$ なる m に対応する添数を持つからこの場合も (6) 式は成立する。

II の証明.

$$P_{\alpha_1 \cdots \alpha_k} = 1,$$

$$P_{\alpha_1 \cdots \alpha_{\gamma-1} i \alpha_{\gamma+1} \cdots \alpha_k} \quad (i=1, \dots, n; \gamma=1, \dots, k)$$

を任意に与えて条件式 (F) によって帰納的に $P_{\beta_1 \cdots \beta_k}$ を定義する。この場合添数の組 $(\beta_1 \cdots \beta_k)$ に対応する関係式が条件 (F) に含まれない場合には $P_{\beta_1 \cdots \beta_k}$ は任意に定め得るから, (3) 式が少なくとも一つは成立しないように ${}_n C_k$ 個の実数の組 $\{P_{\beta_1 \cdots \beta_k}\}$ を定め得る。このようにして定められた $\{P_{\beta_1 \cdots \beta_k}\}$ は命題 1 によって Plücker 座標とはなり得ない。

H が恒等的に 0 となる場合.

最後に, (2) 式が恒等的に 0 となる場合を考察する。 H の定義が添数 i と j に関して対称的であ

ること及び補題によってつぎの場合を考えれば十分である。

- i) $\lambda - 1 \leq k - \lambda$,
- ii) $(i_1 \cdots i_{\lambda-1})$ と $(l_0 \cdots l_k)$ は同じ添数を含まない,
- iii) $(l_0 \cdots l_k)$ はすべて異なる添数,
- iv) $(l_0 \cdots l_k)$ の任意の順列を $(i_\lambda \cdots i_{k+1} \cdots j_\lambda)$ と表わすとき適当な順列に対して $(i_1 \cdots i_k)$, $(j_1 \cdots j_k)$ はそれぞれ k 個の異なる添数からなる。

命題 2. i), ii), iii), iv) の仮定を満たす添数の組に対して H が恒等的に 0 となるのは奇数 λ に対して

$$H_{i_1 \cdots i_{\lambda-1} [i_\lambda \cdots i_{k-\lambda} \cdots i_{k+1} \cdots j_\lambda] i_1 \cdots i_{k-\lambda}}(P)$$

の形に表わされる場合かつこの場合に限る。⁵⁾

証明. (2) 式において $(i_1 \cdots i_{\lambda-1})$ の中に $(j_{\lambda+1} \cdots j_k)$ と異なる添数がある場合は恒等的には 0 とならないから

$$H_{i_1 \cdots i_{\lambda-1} [l_0 \cdots l_k] i_1 \cdots i_{\lambda-1} \cdots i_{k-\lambda}}(P),$$

更にこの場合 $(i_\lambda \cdots i_{k-\lambda})$ の中に $(l_0 \cdots l_k)$ と異なる添数があると恒等的には 0 とならないから

$$H_{i_1 \cdots i_{\lambda-1} [i_\lambda \cdots i_{k-\lambda} \beta_1 \cdots \beta_\lambda \gamma_1 \cdots \gamma_\lambda] i_1 \cdots i_{k-\lambda}}(P) \quad (9)$$

の形を考案すれば十分である。 λ が偶数のとき (9) 式は恒等的には 0 でない。(8) 式参照) λ が奇数のとき (K は (8) 式の定数)

$$\begin{aligned} (9) \text{ 式} &\equiv K \sum \varepsilon \binom{\beta_1 \cdots \beta_\lambda \gamma_1 \cdots \gamma_\lambda}{s_1 \cdots s_\lambda t_1 \cdots t_\lambda} P_{i_1 \cdots i_{k-\lambda} s_1 \cdots s_\lambda} P_{t_1 \cdots t_\lambda i_1 \cdots i_{k-\lambda}} \\ &\equiv K \sum \varepsilon \binom{\beta_1 \cdots \beta_\lambda \gamma_1 \cdots \gamma_\lambda}{t_1 \cdots t_\lambda s_1 \cdots s_\lambda} P_{i_1 \cdots i_{k-\lambda} t_1 \cdots t_\lambda} P_{s_1 \cdots s_\lambda i_1 \cdots i_{k-\lambda}} \\ &\equiv (-1)^{\lambda^2} K \sum \varepsilon \binom{\beta_1 \cdots \beta_\lambda \gamma_1 \cdots \gamma_\lambda}{s_1 \cdots s_\lambda t_1 \cdots t_\lambda} P_{i_1 \cdots i_\lambda i_1 \cdots i_{k-\lambda}} P_{i_1 \cdots i_{k-\lambda} s_1 \cdots s_\lambda} \\ &\therefore (9) \text{ 式} \equiv 0. \end{aligned}$$

添数の組 $(\beta_1 \cdots \beta_k)$ が $(\alpha_1 \cdots \alpha_k)$ のいずれとも異なる添数を m 個含むとする。 $m=0, 1$ の場合は任意の λ に対して (3) は常に恒等式となる。 $m \geq 2$ の場合は $(\alpha_1 \cdots \alpha_k)$, $(\beta_1 \cdots \beta_k)$ の順列 $(i_1 \cdots i_k)$, $(j_1 \cdots j_k)$ を例えば

$$j_{r+1} = i_r \quad (r=1, \dots, k-m)$$

なるように定めれば, 任意の λ に対して (3) は恒等式とならない。したがって定理において $m \geq 2$ なる任意の添数の組 $(\beta_1 \cdots \beta_k)$ 及び任意の λ に対して恒等的には 0 でない式 (3) を対応させることができる。

注 Grassmann 多様体の次元を考えればこの性質は当然予想される。

文 献

- 1) N. Bourbaki ; Algèbre Multilinéaire, Hermann (1948), 95
- 2) 一柳宣男 ; 外積方程式系の Complete の条件II, 鹿大教研究紀要, **18** (1966), 1-8
- 3) W. V. D. Hodge & D. Pedoe ; Methods of Algebraic Geometry I, Cambridge Univ. Press (1947), 312-315
- 4) 同 上 II (1952), 378-379
- 5) 弥永昌吉, 布川正巳 ; 代数学, 岩波 (1967), 174, 176-177
- 6) J. A. Schouten & W. v. d. Kulk ; Pfaff's Problem and its Generalizations, Oxford Univ. Press (1949), 14
- 7) B. L. van der Waerden ; Einführung in die Algebraische Geometrie, Springer (1939), 19-23.

Summary

Let H be defined as follows :

$$H_{i_1 \dots i_{\lambda-1} [i_0 \dots i_k] j_{\lambda+1} \dots j_k}(\mathbf{P}) \equiv \sum \varepsilon \binom{i_0 \dots i_k}{i_0 \dots i_k} P_{i_1 \dots i_{\lambda-1} i_0 \dots i_{k-\lambda}} P_{i_{k-\lambda+1} \dots i_k j_{\lambda+1} \dots j_k}$$

where $\varepsilon \binom{i_0 \dots i_k}{i_0 \dots i_k}$ is the signature of permutation $(i_0 \dots i_k)$ of $(i_0 \dots i_k)$, and summation is over all possible permutations of $(i_0 \dots i_k)$. Then our result is stated as the following :

Theorem. Let $\{P_{\beta_1 \dots \beta_k}\}$ be ${}_n C_k$ real numbers which are not all zero, say $P_{\alpha_1 \dots \alpha_k} \neq 0$, which are skew-symmetric in the suffixes. For arbitrary k -tuple of suffixes $(\beta_1 \dots \beta_k)$ ($\beta_1 < \dots < \beta_k$), consider the following equation :

$$H_{i_1 \dots i_{\lambda-1} [i_{\lambda} \dots i_k] j_{\lambda+1} \dots j_k}(\mathbf{P}) = 0 \tag{1}$$

where $(i_1 \dots i_k)$ is a permutation of $(\alpha_1 \dots \alpha_k)$, and $(j_1 \dots j_k)$ is a permutation of $(\beta_1 \dots \beta_k)$.

(i) A necessary and sufficient condition for $\{P_{\beta_1 \dots \beta_k}\}$ to be Plücker coordinates is that (1) are satisfied for all $(\beta_1 \dots \beta_k)$ ($\beta_1 < \dots < \beta_k$).

(ii) Any condition which consists from part of the system of all essential equations in (1), is not a sufficient condition for Plücker coordinates.